

南アルプス市立白根源小学校

令和5年度 後期学校関係者評価書

白根源小学校学校評価委員会

はじめに

世の中の動きが徐々にコロナ前の生活を取り戻している中、学校現場においても同様であり、この間に起きた教育界の改革や現場で工夫してきた取組をさらに進めて、新たな教育の在り方を模索し確立する時代へと入ろうとしている。本校でも、全職員で意見交換をしながら、模索し実行しつづけてきた。そのような中での学校評価である。まず、自己評価・児童アンケート・保護者アンケートの結果を職員全員で真摯に受け止め、成果や課題を考察し、今後の具体的な取り組みについてまとめた。そして、学校関係者評価委員会を開催し、より良い学校経営へと向かうよう話し合いの機会をもった。学校評価委員一人一人がそれぞれの立場から多方面の意見を出し、有意義な時間となった。今後の学校運営の一つの指針としてほしい。

○学校評価委員

有野 正樹（前源地区自治会連合会長）
有野 守代（主任児童委員）
小林 幸次（有識者）
河村 徳仁（有識者）
小林 正紀（元PTA会長）
川村 正雄（源地区自治会連合会長）
小澤 順司（源地区育成会長）
笹本 弘明（PTA会長）



○学校より 坂本 なおみ校長 相川 也寸志教頭 米山 茂雄教務主任

自己評価の結果を受けて

①小中一貫教育について

- 今年度より小中一貫教育の項目を学校評価に取り入れ、小中で共通の項目を設けている。今後小中で結果を比較分析していくことを確認した。
- 御勅使スタンダードについては、小中連携協議会の中で各学校ともに教職員が十分に意識できていないのではという話が出ていた。今回の学校評価を受けて、御勅使スタンダードの内容が児童生徒の実態と照らしてどうなのか年度ごとに検討が必要であることや、年度が替わると職員も変わるため年度始めに全員で内容の確認・共有が必要であることなどを確認した

②学校教育目標、経営方針・学校運営について

- 学校教育目標、学校経営方針等 A 評価が多いことは非常に喜ばしいことである。これからも小さな学校であるが教職員一丸となって児童の成長に向かっていきたい。

③学級経営，学習指導について

- 家庭学習週間を年3回設け取り組んでいる。ICTの取組が本格化し、家庭との連携を多く図ったことから、家庭学習についての評価が上がったものと思われる。
- 今年は、かなりタブレットを使った授業実践、授業改善ができつつある。教員の意識改革も進んでいる。現在白根源小では、ICTの使用時間をできるだけ長くするよう取り組んでいる。ただ使うだけでなく、授業の形態を変えて子どもの学びを変えていくという方向にかじを取る、よいきっかけの年になっていると思う。評価委員会での話し合いをもとにさらに進めていきたい。

④児童理解，生徒指導について

- 少数ではあるが、「集団が苦手」という児童が増えている。集団の音が苦手、人の動きが苦手である子が一定数増えているのが現状である。
- 今年、担任一人だけでなく複数の教員の目で見えていく体制に挑戦している。そんな中で、様々な子の問題や悩みを早期発見して声をかける、たくさんの方で関わることで救われる子どもたちも少なくないと思われる。
- 学校は勉強するところであるが、子どもが楽しく学校に通える雰囲気があるというのが大切である。そういう雰囲気を実現するために、良好な地域関係があればさらによいかと考える。教職員も個人の資質や特性はみな違うが、子ども達が楽しく通える雰囲気だけは作っていくことを確認した。

⑤保護者・地域連携について

- 多くの出前授業が行われている。地域の業者の方々にも数多く講師として来ていただき、地域の学校としての活動ができている。業者の方からも「何かありましたら、声をかけていただきたい。」と協力的であることがありがたい。
- 「家の人と災害の話をするか」の設問に関連して、この地域は水害に見舞われていた歴史がある。重機だけでなく防災の面でも出前授業ができるのではないかと考えている。具体的には、枳形堤防など授業はすぐにでも設定できそうである。
- 教育課程で目指す学びの中では、単に机上の勉強だけでなく、学んだことを生活にいかにつなげていくかを大切にしている。地域の方の出前授業や、生の声を届けていただくのことは子どもたちにとってとても良いことかなと考えている。

児童アンケートの結果を受けて

学習・授業について

- 学校評価の中で一番気になる点として、授業中の発言が少ないことがあげられる。子どもが発言できる雰囲気が大事ではないかとの意見も出された。源小は小さな集団であるが、いずれ中学校・高校・社会に出ていく。自分の思ったことを積極的に言えるということをこの年代から育てていかないとならない。これからは学校では、発言の機会や雰囲気づくりに取り組んでいくことを確認した。
- 源小の子どもたちは、中学校に行くと1クラスの中で少数になってしまう。自分の考えを積極的に述べることができるのとよいと考える。コロナによって子ども同士のやり取りが少なくなっている。あらためて学校で取り組んでいく必要がある。

- なんでも言えるクラス集団が大事。そのことに意識をもって取り組んでいる教員もいる。それが全体に広がっていけばよいと思う。

保護者アンケートの結果を受けて

学校教育・保護者との連携について

- 家庭学習の推進には、学校だけではうまくいかない。保護者に関心をもつていただく。コミュニティスクールが始まったら、地域で学校に入ってきてもらい子どもたちを指導してもらうなど、そういったことが仕組める。家庭・学校・地域が協力して学力をつけていくことが大切である。そういった雰囲気を作っていくことに力を注いでいく。
- 保護者も一日のスケジュールの中で子どもを見てあげたくても見てあげられない状態であるという実態もある。中学校に行くのがとても不安という話もあり、一貫校になったからと言ってその不安はぬぐえていないという現実もある。去年から一貫校のとりくみが始まっているので、中学校に入学することのハードルが高い子にとっては、さらに中学校と連携をすすめて、少しでも不安を少なくする取組につなげていきたい。
- 夏休み中に特別支援学級の児童対象で、中学校への見学会が実施された。細かい取組かもしれないが、子どもたちの不安が軽減されるとよいと思う。子どもたちに寄り添えるように想像力をもって取り組んでいきたい。